

企画展「井伊家と遠州の城砦」開催スタート！ H29・3・5(日)～6・25(日)



♪春は名をみの風の寒さや♪コートの襟をかき立て、早春賦の歌の一節を思わず口ずさんでしまいました。それでも、日中の暖かさは、確かに春の訪れを感じさせてくれます。桜の開花も間もなくですね。

浜松文芸館の展示室も模様替えをしました。直虎ブームに先駆けて、昨年「直虎漫画展」を催した本館は、今年、井伊家の興亡を26の城砦で紹介する展覧会を開催中です。郷土史研究家・小林佳弘氏の長年の研究に基づいた文と洋画家・大須賀義明氏の情緒あふれる絵画による展示は、当時を彷彿させ、より直虎公や浜松への関心をかき立てられるよう

です。必見は、周智郡森町山中眞喜夫氏所蔵の「遠淡海地志」原本です。七冊の内の一冊「引佐郡」に関する叙述のあるものをお借りし公開させていただきました。中に大河ドラマのワンシーン、直親が小野但馬の守の讒言によって掛川で命を失ったという記述があります。他に、『女城主直虎・知っ得知識』と称するエピソードの数々も面白い！渋川の長山氏作・牛乳パックで作製した「直虎甲冑」、細江胤の会・都筑氏の柴咲コウ似顔絵角舩、井の国歴史懇話会・堀口氏所蔵の法螺貝などが展示室を彩ってくれています。

☆直虎4部作 各一冊 100円好評販売中 ☆近日中に「細江物語」発行予定 乞うご期待

浜松市民文芸第62集 発刊

ありがとうございました！

今年も多くの市民の皆様にご投稿いただき、充実した市民文芸誌が出来上がりました。年代や性別等を越えて、どの作品も作者の熱意と瑞々しい感性が感じられ、感心するばかりです。「自分は文章を書いたり俳句を作ったりすることなど苦手だ」とおっしゃる方におすすしたいことがあります。それは、他の方の作品を読み味わう、鑑賞することです。是非、お手にとって読んでみてください。そこから、新しい世界が広がるかもしれません。 ※浜松市民文芸は浜松文芸館で販売中 1冊¥500円



館長のひとり言・・・春に思う

弥生3月は別れの季節。そして、旅立ちの時。寂しさの漂う中にも新世界への意欲が感じられるとき。そこで、思い浮かぶのは、「春風や鬨志いだきて丘に立つ」高浜虚子の句で

す。私たちは、人生、いえ、日々の生活の中で、何度も節目を迎えます。この3月・4月もその節目の一つ。自分を変える、やり直せるチャンス！今までのことを顧みて心新たに行動したいものです。しかし、言うは易し行うは難し。これまた自分の心との戦いですね。懲りずに4月から一つ習い事を始めようと決意を新たにしました下石です。

湖郷の詩人清水みのる 8 怠惰な学生生活 謹慎処分を受ける

浜松文芸館講演会講師 和久田雅之

「道草に思い出をよせて」は次のように続く。

放課後、普濟寺の境内に七、八人のグループと集って、回覧作品を持ち寄っては批評し合ったもので、生かじりだったが生田春月の詩集からハイネを知り、吉田絃二郎の「小鳥の来る日」を語り合ったのもその頃であったろうか。

梢を通して見上げた晩秋の空の青さが眼に痛いほど今もはっきり思い出される。然し当時新たに校長に就任された佐藤礼云先生の教育方針は厳しかったように思う。僕達、軟弱な生徒がいたからばかりではない。伝統ある浜中健児を育成する為に専念された校長は、例のストライキ防止の為に意をそそがれていた様子で、その余波で僕達文学グループの活動にも監視の目が光ったのは当然であろう。僕達は確かに怠惰な生徒になりつつあった。

実際みのるの浜中での授業・生活態度がよくなかったのだろう。油揚げという綽名の数学教師には叱られ通しだったし、チンポという博物教師にはずっと睨まれていた。もちろん、厳格で誰からも恐れられていた体操教師花井楊五郎は、鬼より怖かったという。みのる自身、そのような自分を肯定していたわけではなかった。

柔道衣を着てストライキの先鋒に交じって普濟寺に立て籠った日の、少年の胸を吹きぬけた隙間風の悲しさ、富塚の佐鳴湖畔で片なぎの葦の葉ずれの音に何故かは知らず涙してサボっていた日のぼく、ぼくの浜中における倦怠期はのっぴきならぬところまできていたらしい。

この当時、中学校の退学率は極めて高く、浜中でも不良と見られる硬派の連中と共に軟派の生徒も、一人、二人と脱落していた。みのるもその一人となったのである。

3年生の大正9年（1920）晩秋の頃、体操の時間中、鉄棒の尻上がりをした時、尻ポケットに入れていたなた豆煙管きせるが落ちてしまった。2、3日後、母いわが学校に呼び出され、謹慎処分が言い渡された。数か月前の7月18日父が死亡したため、子ども3人を抱え女手一つで苦勞していた母を一層苦しめることになってしまった。この頃、浜中のグラウンドの南側にあった浜松高等工業（現静岡大学工学部）で、日本初のテレビ映像に成功する高柳健次郎が必死に研究をしていた。高柳は後年、みのるが専属契約を結んでいた時ビクターの重役をしている。同じ頃、彼は五十嵐太刀雄の「海のロマンス」という本を耽読。高等商船学校（現東京水産大学）に合格していた先輩から薦められて読んだ「船の世界周遊紀行」がきっかけで、高等商船入学を考えるようになった。

話をもとに戻すと、彼は

これでぼくも浜中を退学することが出来ると思った。内心喜んでいたのかもしれない。厳しい校律にその頃のぼくはうんざりしていたことは事実である。すでに浜中を退学して東京や京都の中学に転校している連中に、新しい学校の様子を聞くと、もうぼくはじっと停学処分の解ける日を待つ気にはなれなかったのである。

と記している。